

亀甲形陶棺の形について想うこと

岩本 えり子

陶棺は大きく亀甲形と家形に分類されています。この中の「亀甲形陶棺は何をモデルに製作されたのだろうか」という疑問は以前から抱いていました。

島根県立八雲立つ風土記の丘資料館を訪れたのは昨年の3月の事でした。館に入ると、まるで生きもののように横たわっている1つの陶棺が私を釘付けにしてしまいました。この陶棺は渋山池1号横穴墓出土のものでした。考古学的には素人の私ではあるが、通常津山市周辺で出土するものとは形、文様、製作手法など全く異質な感じを受けたのです。すなわち、幅が狭く細長い形。棺の底は平らではなく、丸みをおびている。外面は竹を輪切りにし、その断面を押し付けた円形文で飾っている。

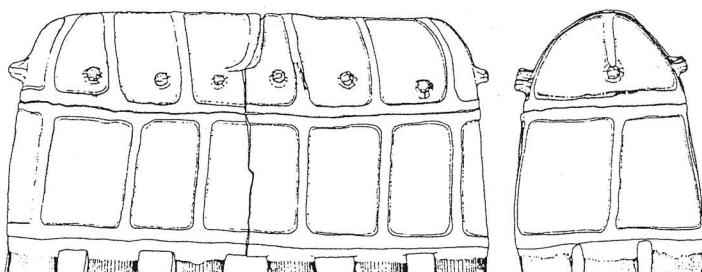
作り方は粘土ひもを横積みするのではなく、立てた状態で輪積みで作られており、小口側に円盤の充填痕跡が見られました。さらに驚いたことには脚がすべて分離しているのです。本来、脚は棺本体に接続しているものなのに、切り離して脚だけ別に製作されていました。ちょうど植木鉢のようでした。

私はこの陶棺を見て咄嗟にカイコ(蚕)を想像しました。芋虫のような形が似ていること。植木鉢は足を、円形の竹管文は斑紋、突帯は環節を表現したものであろうと実感したからです。通常の亀甲形

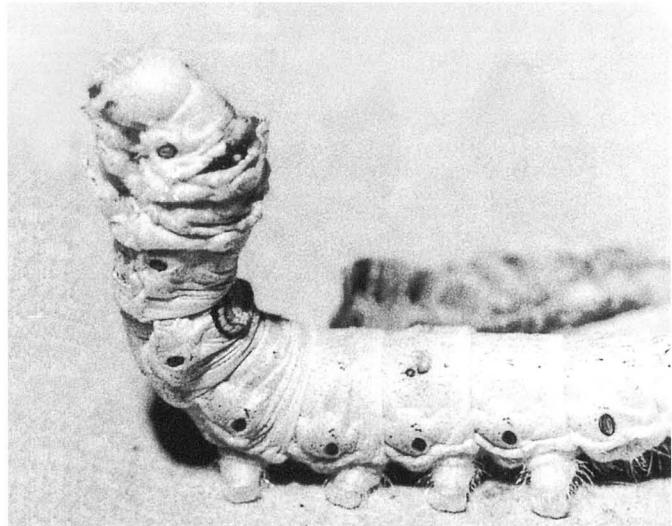
陶棺の場合は蓋の突起が斑紋と考えられます。では何故、死者を葬る際の入れ物にカイコを選んだのでしょうか。被葬者とカイコひいては養蚕・絹生産とが結び付くのでしょうか。これについて回答を持っているわけではありません。素人の自由な発想をお許しいただき私なりの考え方を述べさせていただきたいと思います。

古事記・日本書記には「神の頭や眉から蚕、桑、繭が化生した」記事が見られます。さらに逆上れば、魏志倭人伝にも蚕桑(養蚕の事)が記載されているという(註1)。これらのことから少なくとも陶棺の消長期間である6世紀後半~7世紀を中心とした時期には養蚕、ひいては絹生産があったことが考えられます。

次に陶棺の分布の問題との関係について触れたいと思います。陶棺の分布は岡山県それも津山を中



コウデン2号墳出土陶棺(註4)



カイコの幼虫(註5)

心とした美作地方に集中しています。一方、桑の自然分布を見ると、日本列島の中で中国地方にだけケガワという種類のものが分布しています。後は北海道から九州までヤマケガワという種類のものにおおわれていると言われています（註2）。

また、養蚕に関係する地名も馬桑、桑上、桑下、養野、桑瀬、桑原、桑野、錦織と多く残っています。

これらのことから、陶棺と養蚕ないし絹生産の関係が多少なりとも言えるのではないかと思います。しかし、確実に陶棺に伴って絹が出土するなどの客観的な事例がない以上、あくまでも推測の域でしかありません。

折口信夫は、「たまごの古い言葉はかひ（顛）である。また蚕にも此意味があったのだろうと思はれる。物を包んで居るのが、かひで、丁度もなかの皮の様に物を包んで居るものを言うのである。此かひは密閉してあって、穴のあいて居ないのがよかったです。其穴のあいて居ない容器の中に、何処からともなく這入つて来るものがある。其這入つて来るものがたましいであって、此中に或期間を経過するとたましいが成長して、其かひを破って出現する」と言っている（註3）ように死者の魂の再生復活を考えていました。

カイコは何回も脱皮して成長し、マユ（繭）をつくりサナギ（蛹）となる。最後には羽化してカイコがとなって飛び立って行く。当時の人々はこのカイコの成長発展過程にあやかって、死者をカイコを摸した入れ物（陶棺）に入れる事によって、生命（魂）の再生復活を祈ったのではないでしょうか。

従来、鉄生産との関連でとらえられがちだった陶棺の性格について、養蚕・絹の視点から見てみましたが、私の能力の範囲を越えます。

以上、私の感性にまかせた実感を述べさせていただき終わりとします。

（註1）ものと人間の文化史『絹I』伊藤智夫 法政大学出版局

（註2）同 上

（註3）折口信夫「剣と玉と」『折口信夫全集』第20巻 中央公論社

（註4）村上幸雄「稼山古墳群」「稼山遺跡群」2 1980年より引用

（註5）佐々木 崑『カイコの一生』フレーベル館1992年より引用